

群 教 七	G11 - 02
	平18.232集

中学校・高等学校における キャリア教育の推進に向けた調査研究

－実践マニュアルを活用した、キャリア教育導入期の指導について－

《研究の概要》

本研究は、県内の全公立中学校及び公立高等学校を対象とした調査を基礎資料として、本県の中学校及び高等学校におけるキャリア教育の充実についての提言を行うことを目的とする。学校には、「教員の意識を変える・すぐに活用できる・中高の接続と連続性に配慮する」という視点でのキャリア教育導入期における具体的提案を行い、関係機関、家庭及び地域等には、キャリア教育推進に寄与する支援の在り方についての提言を行う。

I キャリア教育への期待

「いい学校→いい会社→いい人生」という価値観が大きく揺らぎ、充実した人生を送るためのビジョンを描くのが困難な時代となった。

近年の産業・経済の構造的変化や雇用の多様化等を背景に、就職・進学を問わず児童生徒の進路をめぐる環境は大きく変化している。若者の精神的・社会的な自立の遅れ、高い早期離職率、フリーターやニートと呼ばれる若者の存在等が社会問題にもなっている。文部科学省も平成16年1月の調査研究協力者会議報告書で、「学校における取組がともすれば『生きること』や『働くこと』と疎遠になる傾向があったのではないかと指摘した。

中学校や高等学校では、これまでも進路指導が行われてきたが、いわゆる出口指導に終始した感も否めない。若者を取り巻く状況が激変し、様々な社会問題も顕在化した今、出口指導中心の進路指導では対応しきれないという現実が突きつけられたのである。こうした事態を打開するため導入されたのが、キャリア教育である。

「児童生徒が『生きる力』を身に付け、社会の激しい変化に流されることなく、それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟にかつ、たくましく対応し、社会人・職業人として自立していくことができるようにするキャリア教育」の推進を、文部科学省は平成18年11月の調査研究協力者会議報告書で訴えた。キャリア教育は、児童生徒に人生という長い道のりをどう歩むかについて考えさせるものであり、「児童生徒の全人格の成長・発達を目指す」という理念を具現化する実践でもあることを示し、推進の重要性を強調したのである。

このような現状を受け、群馬県の中学校及び高等学校におけるキャリア教育の推進の在り方を探り、学校にはキャリア教育実践の第一歩についての提案を、関係機関、家庭及び地域等にはキャリア教育推進に寄与する支援の在り方についての提言を目的として、本研究を行った。

II キャリア教育に関する調査について

研究を推進するための基礎資料を得るために、「キャリア教育に関する調査」を実施した。以下に、実施概要と調査結果の分析及び考察の概要を記す。(詳細については、資料編参照)

1 実施概要

(1) 調査対象

- 県内全公立中学校175校の第3学年主任
- 県内全公立高等学校（通信制を除く）延べ93校の進路指導主事

(2) 調査項目

- 調査項目1 キャリア教育にかかわる取組の実施状況について
- 調査項目2 キャリア教育で生徒に身に付けさせたい能力について
- 調査項目3 キャリア教育充実のための条件整備について
- 調査項目4 キャリア教育に関する考え（意識）について
- 調査項目5 キャリア教育充実のために必要な教員の研修について

2 調査結果の分析及び考察の概要

調査結果から、キャリア教育にかかわる何らかの取組はすべての学校で行われていることが明らか

になった。表1に示した各調査項目ごとの分析及び考察は、この実態を前提として導き出されたものである。

表1 各調査項目ごとの分析及び考察

	中 学 校	高 等 学 校
調 査 項 目 1	体験活動はほぼ100%実施されているが、事後の発表会等の実施率は43%である。事前・事後を含めた体験活動等の内容の充実が必要である。	実施率は低いが、課程(全日制・定時制等)や学科(普通・専門・総合等)に関係なく実践できるものとして、「キャリアカウンセラーの活用」が考えられる。
調 査 項 目 2	特に以下の能力の向上を意識した取組が必要である。 ○コミュニケーション能力 ○役割把握・認識能力 ○計画実行能力	特に以下の能力の向上を意識した取組が必要である。 ○コミュニケーション能力 ○課題解決能力
調 査 項 目 3	教職員の共通理解の上に、キャリア教育の取組が必要である。	多様な進路選択に対応するために、教員の指導力の向上が必要である。
調 査 項 目 4	キャリア教育に関する教員の意識の変容と、共通理解を促す取組が必要である。	
調 査 項 目 5	キャリア教育学習プログラムの開発のための研修が必要である。	キャリアカウンセリングを用いた指導実践を実現するための研修が必要である。

Ⅲ 提言及び提案内容の検討

提言及び提案内容の決定に当たり、以下に記す調査研究の方針3点と調査結果の分析及び考察から導かれた項目3点を検討材料とした。

1 調査研究の方針

本調査研究の推進に当たり、学校への提案については、以下の3点を基本的な方針とした。

なお、関係機関、家庭及び地域等への提言については、各学校におけるキャリア教育の推進を支援するという視点でまとめていきたいと考えた。

(1) 教員の意識を変える

「キャリア教育についての教員の意識を変え、推進への共通理解を図る」ということである。「キャリア教育は新しい取組ではない(これまでも行われている)」「キャリア教育は必要である(生徒の全人的な成長に寄与するものである)」、こうした意識の共有が、キャリア教育の推進につながると考えた。

(2) 学校ですぐに活用できる

「学校ですぐに、しかも無理なく導入できる」ということである。多忙な現場での推進を考えると、これまでの取組を見直した内容の提言が必要である。また、先行事例を参考にすると、実践しやすい教科や領域に絞ったスタートという形態

が適していると考ええる。

(3) 中学校・高等学校の接続と連続性に配慮する

「中学校から高等学校の6年間を見据え、その連続性と接続に配慮する」ということである。なぜなら、生徒の中学校から高等学校への円滑な移行を実現するためには、生徒の発達段階を踏まえたキャリア教育の実践が必要だからである。

2 調査結果の分析及び考察から導かれた項目

(1) キャリア教育についての正確な理解を促す取組が必要である

キャリア教育にかかわる何らかの取組は、すべての学校で行われている。しかし、調査項目4の調査結果(資料参照)を見ると、「これまでの進路指導や職業教育とキャリア教育は同じものである」と認識している教員も多く、キャリア教育に期待感よりも不安感を抱いたり、否定的な意見ももったりする場合も少なくない。そこで、キャリア教育に対する正しい理解を促す取組が必要であると考えた。

(2) 各学校におけるこれまでのキャリア教育にかかわる実践内容の見直しと充実が必要である

調査研究の方針でも触れたが、「キャリア教育は新しい取組ではない」という視点が大切になる。今回の調査でも明らかなように、これまでもキャリア教育にかかわる取組は行われている。調査項

目1及び2の分析等を参考として、これまでの取組の見直しや充実を図ることがキャリア教育推進につながると考えた。

(3) キャリア教育の実践に当たり、中学校及び高等学校の教員に不可欠と思われる資質を向上させる取組が必要である

調査項目5の、キャリア教育充実のために必要な教員の研修についての質問に対し、中学校では学習プログラム開発、高等学校ではキャリアカウンセリングという回答が多くを占めた。また、調査項目3でキャリア教育充実のための条件整備について質問したところ、中学校では「キャリア教育を推進するための学校内の組織、体制づくり」の優先度が最も高かった。これは、教職員の共通理解を踏まえた学習プログラムによる組織的な取組が必要だという考えの表れであるにとらえた。高等学校では、「教員の資質向上と専門的能力を有する教員の養成」の優先度が最も高かった。これは、生徒の多様な進路選択に対応するためであると考え、教員の資質あるいは専門的能力として、キャリアカウンセリング能力に着目した。

IV 学校への提案

キャリア教育の推進においては、すべての教職員が正しく理解し、必要性を認識したキャリア教育の導入が必要であると考えられる。

また、キャリア教育の導入については、子どもたちの進路をめぐる環境の変化に対応する方策として、一日も早い導入が望まれている。しかし、キャリア教育の実践に当たり、万全の準備を経て動き出すとすると、どの学校でも相当の準備期間を要すると考えられる。こうした状況に配慮し、今回の提案は、各学校におけるキャリア教育推進の第一歩を支援する内容とする。

1 提案

中学校及び高等学校におけるキャリア教育の円滑な導入に役立つ「ぐんまのキャリア教育実践マニュアル」の活用

「ぐんまのキャリア教育実践マニュアル」(以下、実践マニュアル)は、中学校及び高等学校におけるキャリア教育を推進するためのマニュアル(手引き)のことである。「理論編」「中学校編」

「高等学校編」の3部から成り、今回実施した調査結果を基に、学校ですぐに活用できる資料として提供するために開発したものである。

実践マニュアルは、該当校種編の活用にとどまらず、中学校及び高等学校が相互の取組を知ることができる内容になっている。例えば、中学校におけるキャリアカウンセリング実施には高等学校編が参考となり、高等学校でガイダンス的な指導や体験学習を行う場合には中学校編が参考になる。このような活用が、生徒理解に役立つとともに、調査研究の方針である「中学校と高等学校の連続性に配慮する」ことにもつながり、円滑な移行の実現にも寄与するものであると考えた。

以下に、「理論編」「中学校編」「高等学校編」の概略及び特長を記す。

(1) 理論編

- キャリア教育の実践に当たり、すべての教職員に必要なと思われる共通理解事項を6つの項目に絞り込んで取り上げ、理論編としてまとめた。

(2) 中学校編

- 職場体験学習等をはじめとしたこれまでの活動をキャリア教育という視点でとらえ直したうえで、取組を充実させるための資料を提供する。
- 原則的に、事前指導から事後指導に至るまでを各活動の単位とし、必要に応じて事後指導を充実させる。
- 「学級活動」を中心としたプログラムを作成し、すぐに活用できる指導資料とワークシートを提供する。
- 中学校3年時後半には、今後の自己のキャリア形成に関する指導、特に高校生活への円滑な移行(適応)を意識した指導に配慮した資料を提供する。

(3) 高等学校編

- 高等学校では、課程や学科に関係なく効果が期待できるものとしてキャリアカウンセリングを取り入れたプログラムを提供する。
- 各学年の最初には、自己理解を深めるための資料やワークシートを配置する。
- 高校3年生の卒業を控えた時期に、今後の自己のキャリア形成に関する指導を行い、「初等中等教育と高等教育との接続」及び「学校教育と職業生活との接続」に配慮する。

2 実践マニュアルの内容と活用方法

(1) 理論編

ア 研究のねらい

キャリア教育の推進に向け、群馬県のすべての教職員が、キャリア教育について正しく理解し、その必要性を認識できるようにすることを目指し、理論編を作成した。

なお、キャリア教育の一日も早い導入を実現するため、多忙である現場の状況にも配慮し、キャリア教育の推進に必要不可欠であると考えられる内容に絞り込んだ。

イ 内容及び活用方法

(ア) 内容

調査結果から、「キャリアの概念が説明できない」、「キャリア教育と進路指導との違いが分からない」という教員の存在が確認された。このような調査結果と、キャリア教育を推進するすべての教職員が共通理解すべきである内容との観点から、以下の6項目を理論編の内容として設定した。概要は以下のとおりである。

① キャリアの定義

キャリア教育の推進には、キャリアの概念の把握が不可欠だと考え、その概念を平易な言葉で表現することに努めた。キャリアが、「個人」と「働くこと」との関係の上に成り立つ概念であることを強調した。

② キャリア教育の定義

キャリアの概念を受け、キャリア教育を定義した。また、各学校においてこれまでなされてきた取組がキャリア教育にかかわるものであったことを確認でき、今後の推進についての構想をもてる内容となるよう配慮した。

③ キャリア教育導入の背景

キャリア教育導入の背景を、「学校から社会への移行をめぐる課題」、「子どもたちの生活・意識の変容」の二つの視点からとらえ、フリーターやニート等の社会問題を取り上げた。

④ キャリア教育と進路指導との関係

これまでの進路指導と今後の取組が期待されるキャリア教育について、共通点や相違点等を指摘しながら、両者の関係を明らかにした。

⑤ キャリア教育の進め方

今回は特に、キャリア教育の導入時における効果的な取組の在り方を取り上げた。併せて、キャリア教育導入後の推進についてもふれた。

⑥ キャリア教育で育成することが期待される能

力や態度

現在、関係各機関から、キャリア教育で育成が期待される能力・態度の具体例が明示されている。それらを参考に、各学校における能力・態度の設定の在り方の方針を示した。

(イ) 活用方法

実践マニュアルの活用手順として、理論編の内容に習熟した後に、中学校編及び高等学校編の活用を想定している。理論編の内容が、キャリア教育を推進するすべての教職員が理解すべき内容に絞り込んであるからである。こうした手順を踏むことが、キャリア教育のより効率的な推進を実現すると考える。

また、理論編を理解する機会の確保も重要になる。各学校における校内研修、県総合教育センターでの研修講座等が理論編の内容に習熟する機会として考えられる。

(2) 中学校編

ア 基本的な考え方

(ア) 研究のねらい

ほとんどの学校では、職業調べや職場体験学習、上級学校調べや上級学校訪問等が行われている。これらの取組の指導例をワークシートなどの資料とともに示すことで、キャリア教育に取り組む教職員が、共通理解のもとで組織的に実践を展開するとともに、キャリア教育の視点で各取組を見直すという意識を醸成することをねらいとした。

また、上記の取組を配置したキャリア教育の年間指導プログラム等を示した。それらの活用が、中学校の教員に必要とされる資質である、キャリア教育の学習プログラム開発能力の育成に結びつくこともねらいとして考え、本編を作成した。

(イ) 学級活動におけるキャリア教育

キャリア教育にかかわる取組として職業調べや職場体験学習等を実施する場合、事前指導から事後指導までを一つの取組ととらえることが重要であると考え、そのすべてにかかわることが可能なのは、学級担任である。その学級担任が生徒を指導できる機会を授業という枠組みの中で考えると、学級活動におけるキャリア教育の実践が妥当なのではないかと考えた。

また、中学校指導要領特別活動編には、次のような学級活動の内容が挙げられている。

- 学級や学校における生活上の諸問題の解決
- 自己及び他者の個性の理解と尊重
- 望ましい人間関係の確立

- ボランティア活動の意義と理解
- 学ぶことの意義と理解
- 進路適性の吟味と進路情報の活用
- 望ましい職業観、勤労観の形成
- 主体的な進路の選択と将来設計

これらは、キャリア教育で育成したい能力や態度とも共通する内容であり、キャリア教育の実践が、学級活動の取組として適切であると考えた。

イ 内容及び活用方法

(ア) 各学年の指導資料の内容及び活用方法

収録した資料は、学級活動の時間に活用するための題材として作成した。それぞれの題材は、題材名、ねらい、指導計画例、留意事項、ワークシート、参考資料、という構成を基本としている。これらは、従来の学習を、キャリア教育という視点でとらえ直して授業を展開できるように配慮してある(図1)。

2-7 夢を実現するために	
1 ねらい	自分の夢を実現するための進路計画を考え、これからの生活の中の課題や努力点を明らかにする。
2 指導計画例(2時間予定)	
題材名	生徒への支援・留意点
1 自分の道を考えよう	<ul style="list-style-type: none"> ○事前に学習内容を伝え、家の人の考えも聞いておくように話しておく。 ○ワークシート1を配布して、今まで行ってきた職業調べや職場体験学習を思い出させ、具体的に記入させる。 ○よく分からない生徒には、文献やインターネットを活用して作業を進めるようにさせる。

図1 題材の指導計画例

特に人間関係形成能力(自他の理解能力、コミュニケーション能力)育成の視点から、指導計画

例には「グループでの話し合い」「クラス全体での話し合い」「発表会」という形態を取り入れるように工夫した。また、将来設計能力育成(役割把握・認識能力、計画実行能力)の視点から啓発的な体験活動を重視し、事前・事後指導も計画的に実施できるように指導計画を考えた。

ワークシートは、生徒が自由に自分の考えや気持ちを記入できる内容にし、その中で意図的に「自分を振り返り、これからの自分を考える場面」を多く取り入れるように工夫した(図2)。また、授業の様子や生徒の考えが家庭にも伝わるように、必要に応じて生徒と親の話し合いの機会を設け、保護者からの意見や感想を記入できるようにした。

ワークシート1		月 日 ()
自分の道を考えよう		
<small>あなたの夢を実現するためには、どのような進路が考えられますか。今から5年後まで、その時々に必要なことを家の人と相談して考えてみよう。(家の人と考えが違う時は別々に書いてください)</small>		
自分の考え	家の人の考え	
	希望する職業は?	
	その理由は?	
	どんな知識・技能・資格や免許が必要か?	

図2 ワークシートの例

参考資料としては、その題材で授業を行う際に必要な補足資料や、発展的な学習を展開する際に活用できる資料を例示した。

なお、収録した各学年の指導資料の題材及びねらいは以下のとおりである(表2)。

表2 各学年指導資料の題材名及びねらい

実施時期	題材名	ねらい
1年・5月	自分を見つめよう	中学校に入学した自分自身を振り返り、肯定的な自己理解を図ることで、これからの中学校生活に意欲的に取り組もうとする態度を育てる。
1年・6月	係・当番活動の見直し	学級での係活動や当番活動を見直し、自分の役割を自覚して、責任をもって果たそうとする態度を育てる。
1年・7月	身近な人の職業調べ	身近な人の職業について調べることを通して、「職業」や「働くこと」に対する興味・関心を高める。
1年・9月	この人を尊敬しています	自分が尊敬する人物について調べたり、友人の発表を聞いたりすることを通して、自分の将来について意欲的に考える態度を育てる。
1年・11月	興味ある職業調べ	自分の興味ある職業について調べることを通して、「職業」や「働くこと」について考え、望ましい勤労観・職業観を培う。
1年・1月	地域奉仕活動	自分たちが住んでいる地域の施設や公園、道路等を清掃する活動を通して、地域への愛着を深め、社会に貢献しようとする態度を育てる。
1年・2月	将来を思い描こう	自分の夢や将来を考えながら将来設計を思い描き、それに向けて努力しようとする態度を育てる。

1年・3月	1年生を振り返ろう	入学してから今までの中学校1年生の生活を振り返り、2年生に向けて新たな目標をもてるように、意欲付けを図る。
2年・4月	2年生になった自分	2年生になった自分自身を見つめ直し、肯定的な自己理解を図ることで、これからの学校生活に意欲的に取り組もうとする態度を育てる。
2年・5月	働くことについて考えよう	ニート・フリーター問題について話し合い、「働くこと」についての自分の考えをもち、望ましい勤労観を育む。
2年・9月	職場体験学習	自分が興味・関心のある職場を訪問し、実際に仕事を体験することを通して、職業に対する理解を深め、望ましい勤労観・職業観の育成を図る。
2年・11月	上級学校調べ	中学校卒業後、学ぶための多様な機会や制度があることを知り、意欲的に自分の進路について考えようとする態度を育てる。
2年・1月	地域奉仕活動	自分たちが住んでいる地域の施設や公園、道路等を清掃する活動を通して、地域への愛着を深め、社会に貢献しようとする態度を育てる。
2年・2月	立志の決意	立志式の意義を理解し、これからの中学校生活に向けて意欲的に取り組んでいこうとする態度を育てる。
2年・2月	夢を実現するために	自分の夢を実現するための進路計画を考え、これからの生活の中での課題や努力点を明らかにする。
2年・3月	2年生を振り返ろう	2年生になってからの1年間の生活を振り返り、3年生に向けて新たな目標をもてるように、意欲付けを図る。
3年・4月	3年生のスタート	3年生になった自分自身を振り返り、肯定的な自己理解を図ることで、これからの中学校生活に意欲的に取り組もうとする態度を育てる。
3年・5月	働くのは何のため？	働くことに対する様々な価値観について考えることを通して、自分の将来について意欲的に考えようとする態度を育てる。
3年・6月	進路学習会	親子で進路学習会に参加することを通して、進路選択の内容や高等学校入試制度についての概要を正しく理解し、進路選択に対する意識を高める。
3年・7月	上級学校訪問	自分が興味ある学校の説明会や学校公開に参加することで、具体的な進路選択について考えさせ、学習や進路選択に対する意識を高める。
3年・9月	卒業生から学ぼう	自校の卒業生から、現在の高等学校生活の様子や中学校3年生の頃の体験談を聞き、これからの進路選択への意欲を高める。
3年・10月	計画的な進路相談	生徒が保護者や教師と相談しながら、自らの生き方を考え、適切な進路選択・決定ができるようにする。
3年・11月	進路計画を考えよう	中学校3年間の進路学習のまとめとして今までの中学校生活を振り返り、自分の判断と責任で進路計画を立案し、今後の学習への意欲を高める。
3年・12月	面接練習をしよう	高等学校入試で実施される面接の意義を理解させ、入試当日に向けての心構えや態度を育てる。
3年・1月	地域奉仕活動	自分たちが住んでいる地域の施設や公園、道路等を清掃する活動を通して、地域への愛着を深め、社会に貢献しようとする態度を育てる。
3年・3月	3年生を振り返ろう	3年生になってからの1年間の生活を振り返り、有意義な3年間の締めくくりができるように、意欲付けを図る。

(イ) プログラムの作成と活用方法

① キャリア教育全体計画

キャリア教育は学校における教育活動全体を通して行うことを基本としている。したがって例示したキャリア教育全体計画には、生徒の実態や学校教育目標から考えられるキャリア教育の目標、各学年の目標、基本的な考え方(具体的な方針、指導・支援体制、評価について)、各教科・領域でのキャリア教育の目標等を示した。

キャリア教育の実践に当たり、今回の提案では

導入に重きを置いたが、各学校でキャリア教育に取り組んでいく場合、最終的には、キャリア教育を推進するための組織をつくり、学校の実態に応じた全体計画を作成し、職員で共通理解を図りながら進めることが望ましい。併せて、どの教科・領域のどの単元や題材がキャリア教育と関連しているかを洗い出して整理することも必要である。

なお、参考までに、本編にはキャリア教育全体計画作成上の留意点も収録した。

② キャリア教育年間指導計画

各学年ごとに、学級活動、総合的な学習の時間、道徳、啓発的な体験活動、生徒会活動の1年間の流れが分かるような形式で作成してある。(1)でも記述した通り、本編には学級活動を中心とした指導計画を収録したが、キャリア教育の導入に当たり、ほかの教科や領域においてキャリア教育を実践することも可能である。大切なのは、学校として「キャリア教育を実践するうえでの教育課程の中核は何か」をよく話し合い、共通理解を図ったうえで取り組んでいくことである。

③ 学級活動と諸能力との関連

本編に収録した学級活動の題材と学習指導要領との関連、その題材を実践することを通して育成することが期待できる能力(4領域8能力)との関連を例示した。学習指導要領が示す学級活動の内容は、細かく18項目に分けられる。キャリア教育という視点からここでは主に、(1)-(ア)学級や学校における生活上の諸問題の解決、(2)-ア-(ア)自己及び他者の個性の理解と尊重、(3)-(エ)進路適性の吟味と進路情報の活用、(3)-(オ)望ましい職業間・勤労観の形成、(3)-(カ)主体的な進路の選択と将来設計に重点を置いた。また、4領域8能力との関連は、題材の内容の扱い方で変わってくることも考えられるので、指導する教員が教材研究を行い、ねらいを明確にする必要がある。

ウ 期待される効果

本研究で作成した「実践マニュアル 中学校編」を活用すると、以下のことが期待できる。

- キャリア教育の視点から見直された学級活動の指導計画を例示したことで、3年間を見通したキャリア教育が実践できる。また、中学校学習指導要領特別活動編に示されている本来の進路指導に回帰し、自校の進路指導・進路学習の見直しや、改善にもつながると考えられる。さらに、PDF形式及びワープロ文書形式の資料やワークシートを用意したことで、各学校の生徒の実態に応じた内容のワークシートの作成が可能であり、充実した実践に結びつく。
- 生徒の発達段階に応じた指導資料やワークシートを活用して授業実践を行うとともに、計画的な進路相談を取り入れることで、生徒はこれまでの自分自身を振り返り、自己理解を一層深めることができる。また、その結果として、自己の興味・関心や能力・適性に応じた主体的な進路の選択と将来設計を行う態度の育成や、望ま

しい勤労観・職業観等の育成にもつながる。

(3) 高等学校編

ア 基本的な考え方

(ア) 研究のねらい

学級担任が、キャリアカウンセリングを用いてキャリア教育を実践する際に活用することを目指して、「実践マニュアル 高等学校編」を作成した。教員にとっては、キャリアカウンセリングにかかわる専門的な知識の習得と技術の向上に役立ち、その結果として、生徒にとっては自己理解をはじめとするキャリア発達にかかわる諸能力の育成に結びつく資料や教材を提供する。

(イ) キャリアカウンセリングの重要性

本マニュアルではキャリアカウンセリングを、「これまでの自分を振り返ることを支援するもの」、そして、「今できることへの行動(アクション)を支援するもの」として考えている。生徒一人一人が自分らしく人生を歩む、つまり、自分の興味・関心や能力・適性に合った方向へ進むためには、「自分は何者であるか」「どういう存在であるか」という「自己理解」が不可欠である。そのうえで、今できることは未来を描き行動することであるということへの理解を促し、生徒が自らの意志で行動するための支援を行うことが重要であると考え、キャリアカウンセリングの基本的な概念を、この2点であるととらえた。

また、多様な個に対応できるという特長をもつキャリアカウンセリングは、課程や学科にとらわれることなく実践できるキャリア教育であり、高等学校での効果的な展開が望まれる。

さらに、「キャリア教育に関する調査」の結果からも、キャリアカウンセリングの重要性や必要性を現場の教員が認識しているということが伺えた。教員に必要な研修は何かという設問に対し、「基本的なキャリアカウンセリング実施のための研修」や「キャリアカウンセラーの講義や講演」を挙げた学校が多かったのである。こうした現状ならば、実践に必要な資料や教材、方法などを示すことにより、キャリアカウンセリングが実践される機会は増えるであろう。

キャリアカウンセリングという言葉は目新しいもののように感じるが、今まで進路指導として実践してきたことを、生徒への支援、つまり、生徒の気づきや自発的な活動を促すという観点でとらえ直したものであり、教員の誰もが実践できるこ

とであると言える。その性格上、すべての教員があらゆる機会をとらえ、すべての生徒を対象としてキャリアカウンセリングを行うことができれば、最も望ましい状態と言えるが、そのためには進路指導主事を中心としたキャリア教育推進体制の確立が必要である。しかし、現段階ではそうした体制が整備されている学校は少ないと考えられるうえに、キャリアカウンセラーの配置も望めないため、日頃から生徒一人一人をよく理解している学級担任によるキャリアカウンセリングが求められるのが現状であると言える。

イ 内容及び活用方法

キャリアカウンセリングは卒業学年に偏らず、入学時から計画的に実施することが必要である。特に高等学校段階では、キャリア選択とその決定に関するものが重要となる。そこで、様々なキャリア教育にかかわる活動の中から、自己理解、豊富なキャリア・職業・進学情報、主体的な意思決定の3つを中心に挙げた。そして、それらの充実につながる資料をWeb形式でまとめ、収録したマニュアルを作成した。

これらは、教員のキャリアカウンセリング実践で役立つように、キャリアカウンセリングの手法はもちろんのこと、専門的知識の習得や技術の向上に役立つ資料の提供に配慮した。また、生徒に対しては、一人一人のキャリア発達に応じた能力の育成に結びつくように、ワークシート、教材などを収録した。

キャリアカウンセリングに関しては、教員からの一方的な指導では大きな効果は期待できないと考える。生徒自らの意志による経験や行動が最も重要だからである。そこで、ワークシートや教材は、生徒が自ら自分の人生を考え、判断し、行動できるようにするためのものであるという観点で作成した。また、キャリアカウンセリングの基本となる自己理解をはじめとした様々な能力の育成

を図るため、個人でもグループでも取り組めるワークシートを作成し、活用することにも配慮した。

(ア) キャリア教育の年間指導計画例

3年間を見通し、入学から卒業までの流れに沿って、教員にどのような支援ができるかを確認できる年間指導計画例を作成した。ここでは、適時行われることが必要なキャリアカウンセリングの性格上、実施の制約となる時間などの条件は一切示していない。したがって、年間指導計画例に示されたどの場面でどのワークシートが活用できるかについて示すことにした。

(イ) キャリアカウンセリングに関わる指導内容

① ワークシート

キャリアカウンセリングでは、自己理解を中心として様々なキャリア発達に応じた諸能力の育成が求められるが、それらの能力が効果的に身に付くように配慮してワークシートを作成した(図3)。個人ワーク用とグループワーク用という2つの形態に対応し、特にグループワークでは振り返りシートを準備した。活用の仕方なども解説し、最も効果的な活動になるように配慮した(表3)。

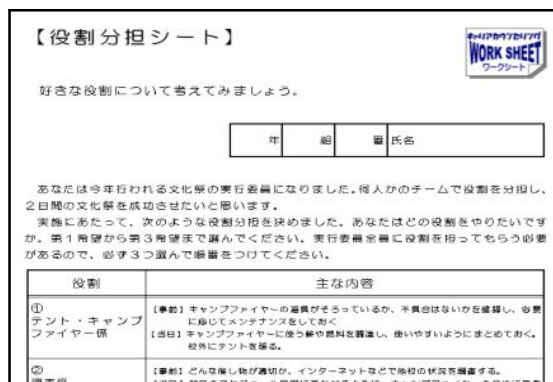


図3 ワークシートの例

印刷してすぐに活用できるPDF形式のほかに、学校の特色や生徒の実態に応じて適宜編集して使用できるようにワープロ文書形式も用意した。

表3 ワークシート全体の構成について

実施時期	ワークシート	形態	育成が期待できる能力
1年・5月	自分の「傾向」チェックシート	個人	自己理解能力
	自己チェックシート	個人	自己理解能力
	自己PRシート	グループ	自他の理解能力、コミュニケーション能力
	キャリア記録シート	個人	自己理解能力
1年・6月	プロフィールシート	個人	自己理解能力
	自己振り返りシート	個人	自己理解能力
1年・7月	職業研究レポート	個人	情報収集・探索能力
	上級学校研究レポート	個人	情報収集・探索能力

1年・10月	記憶・印象シート	グループ	自他の理解能力、コミュニケーション能力
	ライフライン分析シート	グループ	自他の理解能力、コミュニケーション能力
1年・11月	能力チェックシート	個人	自己理解能力
	興味・関心チェックシート	個人	自己理解能力
	職業観・価値観チェックシート	個人	自己理解能力
1年・12月	仕事分類シート	グループ	職業理解能力、コミュニケーション能力
1年・1月	分析結果整理シート	グループ	自他の理解能力、コミュニケーション能力
	仕事・職業考察シート	個人	職業理解能力
2年・4月	長所解説シート	個人	自己理解能力
2年・5月	キャリアアンカーシート	グループ	自他の理解能力、コミュニケーション能力
	キャリアアンカーストーリー作成シート	グループ	自他の理解能力、コミュニケーション能力
2年・6月	役割分担シート	グループ	役割把握・認識能力、コミュニケーション能力
	組織の役割把握シート	グループ	役割把握・認識能力、コミュニケーション能力
2年・7月	職業研究レポート	グループ	情報収集・探索能力、コミュニケーション能力
	上級学校研究レポート	グループ	情報収集・探索能力、コミュニケーション能力
2年・9月	自己信念チェックシート	グループ	意思決定能力、コミュニケーション能力
	会社に対する意識シート	グループ	意思決定能力、コミュニケーション能力
2年・10月	分析結果整理シート	グループ	自他の理解能力、コミュニケーション能力
	キャリアゴールシート	グループ	計画実行能力、コミュニケーション能力
2年・11月	キャリアパスシート	グループ	計画実行（将来設計）能力、コミュニケーション能力
2年・2月	プラン立案シート	グループ	計画実行（将来設計）能力、コミュニケーション能力
3年・4月	成功するためのポイントチェックシート	個人	自己理解能力
	ドリームプランシート	個人	自己理解能力、計画実行能力
3年・5月	行動計画チェックシート	個人	計画実行能力
	AO入試出願シート	個人	計画実行能力
3年・6月	行動計画チェックシート	個人	計画実行能力
	就職希望調査シート	個人	計画実行能力、選択能力
3年・7月	進学希望調査シート	個人	計画実行能力、選択能力
3年・8月	推薦入試出願シート	個人	計画実行能力、選択能力
3年・9月	志願理由書ワークシート	個人	計画実行能力、課題解決能力
3年・2月	学び理解シート①	個人	課題解決能力
	学び理解シート②	個人	課題解決能力
	自己理解シート	個人	自己理解能力
	大学教育レディネスシート	個人	計画実行（将来設計）能力
	アクションプランシート	個人	計画実行（将来設計）能力
	進路指導評価シート	個人	※進路指導に対する評価

② 作成した参考資料

キャリアカウンセリングを行う際に必要となる資料であり、教員の専門的知識の向上をねらいとしている（図4）。生徒の進路決定に伴う職業や上級学校の情報をはじめ、効果的な面接技法や体験学習などにも触れている。ほとんどがWeb形式で作成されているため、生徒に活用させても効果的である（表4）。

なお、使用するデータについては、作成時点で判明している最新のデータを使用した。

医療・福祉系の資格		
医療・福祉系は、もともと資格がなければできない仕事が多い分野です。そのため、上級学校で取得を目指す資格の種類も豊富です。大学や大学院の新増設も多い分野だけに、注目度も高くなっています。		
■社会福祉士 受験資格	■理学療法士 受験資格	■作業療法士 受験資格
■介護福祉士 資格取得	■音楽療法士 資格取得	■精神保健福祉士 受験資格
■言語聴覚士 受験資格	■医師 受験資格	■看護師 受験資格

図4 作成した参考資料の例

表4 作成した参考資料について

実施時期	参考資料	形式	内容
1年・4月	学校基本調査から分かる卒業後の状況	Web形式	中学校から大学までの卒業後の状況
	職業的発達にかかわる諸能力	Web形式	文部科学省が示す4領域8能力
	社会人基礎力	Web形式	経済産業省が示すビジネス界の変化の中で求められる能力
	就職基礎能力	Web形式	厚生労働省が示す若者が社会に出るに当たり最低限身に付けてほしい力
	基礎力	Web形式	リクルート・ワークス研究所が示す働くうえで必要となる能力
1年・7月	キーワードで分類した大学の学部	Web形式	300を超える大学の学部の内容
1年・8月	効果的な体験学習(インターンシップ)	Web形式	インターンシップの流れと必要な指導・書類の書式
	効果的な体験学習(上級学校体験)	Web形式	上級学校体験の流れと必要な指導・書類の書式
1年・2月	職業情報①	Web形式	職業分類
2年・7月	キーワードで分類した大学の学部	Web形式	300を超える大学の学部を解説
2年・8月	効果的な体験学習(インターンシップ)	Web形式	インターンシップの流れと必要な指導・書類の書式
	効果的な体験学習(上級学校体験)	Web形式	上級学校体験の流れと必要な指導・書類の書式
2年・2月	職業情報②	Web形式	新規学卒求人を取り巻く状況を解説
	上級学校で取得できる資格と免許	Web形式	上級学校で取得できる専門的資格を解説
3年・9月	学校基本調査から分かる卒業後の状況	Web形式	主に高等学校卒業から大学卒業までの状況を三者面談等に活用
	入試面接攻略法	PDF形式	入試の面接試験のポイントを解説
3年・2月	社会人の心構え	プレゼンテーション形式	就職決定者に対する就職前の指導に活用
時期不問	生徒の課題に応じた個別指導	Web形式	生徒の課題のパターン別にその対処法を解説
	効果的な面接技法	Web形式	個別面談の方法、カウンセリングとして適切な面接方法を解説
	用語で理解するいまどきの大学	Web形式	変化している大学の在り方や取組を解説
	大学経由で進むスペシャリストへの道	Web形式	スペシャリストを目指すための大学進学を解説

③ 教材

生徒の自己理解を促すために「カードソート」、職業理解を促すために「職業カードソート」を作成した。解説も付け、できるだけ簡単に準備ができるようPDF形式とExcel形式で作成してある(表5)。

表5 教材について

教材	形式	効果
カードソート	Web形式 (PDF形式)	自己理解に役立つ
職業カードソート	Web形式 (Excel形式)	職業理解に役立つ

ウ 期待される効果

本研究で作成した「実践マニュアル 高等学校編」を活用すると、以下のことが期待できる。

○ 年間指導計画例と3年間のキャリアカウンセリングの流れを把握することで、キャリア教育

の指導内容、指導時期が明確になり、キャリアカウンセリングの円滑な実施に結びつく。

また、作成した参考資料自体は教員の専門的知識や指導技術を高めるものであるが、掲載したグラフや図をプレゼンテーション教材に取り込んで活用すれば、よりポイントを押さえた指導が可能となる。さらに、ワープロ文書形式でワークシートを用意したことにより、生徒の実態に応じてその内容を編集することもできる。

このように活用することで教員にとってキャリアカウンセリングの研究や知識・技術の向上に役立ち、ひいてはキャリア教育実践の充実に結びつくと考える。

○ 生徒にとっては、キャリア発達に応じたワークシートを活用することで、様々な事例において自己理解が深まり、さらに、グループワークで活用すれば、付随する諸能力の育成に役立つと考える。

V キャリア教育推進のための提言

文部科学省は平成16年1月の調査研究協力者会議報告書で、キャリア教育を推進するための条件として、教員の資質の向上のほか、保護者との連携の促進、学校外の教育資源活用にかかるシステムづくり、関係機関等の連携と社会全体の理解の促進を挙げた。ここでは、より一層の教員の意識改革を求めることを視野に入れながら、関係機関、家庭及び地域等に向けて、キャリア教育推進に寄与する支援の在り方という視点での提言を記す。

○提言1 教員の意識改革の促進 －群馬県独自の「学校キャリアカウンセラー 認定制度」の創設－

文部科学省は平成16年1月の調査研究協力者会議報告書で、「中学校及び高等学校段階におけるキャリアカウンセリングの重要性」、「すべての教員が基本的なキャリアカウンセリングを身に付けることの必要性」を訴え、国や都道府県教育委員会等が、キャリアカウンセリング研修の実施に取り組むことを求めた。

このキャリアカウンセリングを実践できる教職員の養成を実現する具体策として、「学校キャリアカウンセラー認定制度」の創設を望みたい。

こうした制度の下で、キャリア教育の充実に向けたキャリアカウンセリング能力の向上を図ることは、キャリア教育についての教員の意識を変え、児童生徒の社会人・職業人としての自立を支援するキャリア教育の推進者であるという自覚を促すことにもつながると考える。

わが県では、教育相談資格取得の強力な推進が、各学校における教育相談機能の向上に貢献している現状もある。こうした成功例を参考に研修体系を整備し、学校キャリアカウンセラー認定研修を足掛かりに、本県教職員が足並みをそろえ組織的にキャリア教育を実践していくことで、大きな成果に結びつくことが期待できると考える。

○提言2 保護者への啓発活動の充実 －子どもの進路に関する悩みを抱える親たち を対象とした支援事業等への参加の促進－

キャリア教育の推進において、児童生徒の生活時間の多くを占める家庭のもつ役割には非常に大

きいものがある。とりわけ、保護者のキャリア教育への関心の程度は、キャリア教育推進の状況左右しかねない要素として認識することが必要であると考え、保護者の啓発活動の充実を求めたい。

キャリア教育についての保護者への啓発活動としては、学校からの情報提供や取組の公開等が挙げられるが、今後は、すでに県内でも実施されている「悩みを抱える若者やその親たちへの支援事業」等への積極的参加も望まれる。

このような、保護者への地道な啓発活動によって、キャリア教育が児童生徒一人一人の社会人・職業人としての自立を支援するものであるという共通理解が確立されるとともに、保護者の学校教育への積極的な参画も期待できると考える。

○提言3 地域の教育力の活用 －インターンシップ等の充実に向けた企業の 支援体制の強化及びハローワークやジョブ カフェ等との連携の強化－

地域は、本来、児童生徒たちが同年齢や異年齢の人たちとの多様な人間関係を体験できる場であり、社会性等の涵養を促進する教育の場でもある。この教育力を最大限に活用したものが、キャリア教育における代表的な取組である職場体験学習やインターンシップ等の体験活動である。勤労観や職業観の育成をはじめ大きな成果が期待され、さらなる取組の充実が求められている。

しかし、実施に当たっては、受入事業所等の確保が多大な負担になっている現状も指摘されている。今後も、実施校の増加による受入事業所の競争等、さらに厳しい状況が予想される。文部科学省でも、「キャリアスタートウイーク」などの取組を積極的に展開している。子どもたちの自立につながる事業の推進を支えるために、体験活動充実に向けた企業への協力要請等の支援体制の強化を求めたい。

また、ジョブカフェ（若者就職支援センター）やハローワーク等が有する就業に関する情報は、児童生徒のみならず、教員にとっても非常に有益であると考えられる。これらと学校との連携を密にすることにより、児童生徒在学中のキャリア教育の充実につながるとともに、学校卒業後においても、社会人・職業人としての自立に向けた効果的な支援の展開が期待できると考える。

VI まとめと今後の課題

今回の調査研究は、学校への提案が中心となった。内容も、キャリア教育推進の第一歩を踏み出す際の支援という観点で吟味した。そのため、他の教育関係機関から発行されたキャリア教育に関する資料と比べると、導入に特化した内容となっている。すでに述べたが、群馬県の中学校・高等学校におけるキャリア教育の現状と、実際に指導する先生方の意識等を把握し、それを反映させ、群馬のキャリア教育の充実及び推進を図るという姿勢で調査研究を進めてきた結果である。

今後の研究課題としては、以下を挙げたい。

- 小学校から中学校、高等学校までの12年間を見据えたキャリア教育の在り方
- キャリア教育を効果的に推進する組織、体制づくり
- 各学校でキャリア教育を推進するリーダー養成の在り方
- 各学校と関係機関等との連携の在り方
- 家庭、地域に対するキャリア教育に関する啓発の在り方

キャリア教育をめぐる課題は多いが、学校における課題を的確に把握し、その克服に向けた研究を進めていきたい。また、研究成果の適切な発信にも配慮し、群馬県一丸となってキャリア教育を推進し、群馬の子どもたちがたくましく成長していける環境作りに貢献していきたいと考える。

Web検索キーワード

【進路指導 キャリア教育 体験学習 キャリア
アカウンティング 学級活動】

<参考文献>

- ・文部科学省 『キャリア教育推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を高めるために～』 (平成16年)
- ・文部科学省 『高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議報告書－普通科におけるキャリア教育の推進－』 (平成18年)
- ・文部科学省 『小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引－児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために－』 (平成18年)
- ・中央教育審議会 『初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)』 (平成11年)
- ・文部科学省 『中学校職場体験ガイド』 (平

成17年)

- ・文部科学省 『中学校学習指導要領解説 特別活動編』 (平成10年)
- ・三村 隆男 著 『キャリア教育入門－その理論と実践のために』 実業之日本社(2004)
- ・三村 隆男 著 『図解 はじめる小学校キャリア教育』 実業之日本社(2004)
- ・宮城 まり子 著 『キャリアカウンセリング』 駿河台出版社 (2002)
- ・山崎 保寿 著 『キャリア教育が高校を変える』 学事出版 (2006)
- ・木村 周 著 『キャリア・カウンセリング(改訂新版)』 (社)雇用問題研究会 (2003)
- ・渡辺三枝子 E.L.ハー 著 『キャリアカウンセリング入門 人と仕事の橋渡し』 ナカニシヤ出版(2001)
- ・ベネッセコーポレーション 著 『職業まるわかり事典2006』 ベネッセコーポレーション (2006)
- ・渡部 昌平 著 『高校・大学等における進路指導・就職支援マニュアル』 大学教育出版 (2006)
- ・小野田 博之 著 『自分のキャリアを考えるためのワークブック』 日本能率協会マネジメントセンター (2005)
- ・金谷 千慧子 著 『キャリアデザイン・ワークブック』 嵯峨野書院 (2006)
- ・佐藤 洋作、平塚 眞樹 編著 『ニート・フリーターと学力』 明石書店(2005)
- ・桑原 憲一 編著 『キャリア教育の進路指導資料集－中学校1年－』 明治図書(2006)
- ・桑原 憲一 編著 『キャリア教育の進路指導資料集－中学校2年－』 明治図書(2006)
- ・桑原 憲一 編著 『キャリア教育の進路指導資料集－中学校3年－』 明治図書(2006)
- ・片野 智治 編著 『エンカウンターで進路指導が変わる－生き抜くためのあり方生き方教育』 図書文化社(2001)

<共同研究者>

- | | | | |
|----------|--------|-------|--|
| グループリーダー | 猪熊 仁 | | |
| 指導主事 | ※上原 清司 | 高張 浩一 | |
| (※研究チーフ) | 武藤 一幸 | 中西 信之 | |
| | 加世田直人 | 清水 雅文 | |
| | 今井 俊一 | 井上 淑人 | |
| 長期研修員 | 長谷川 洋 | 田嶋 正幸 | |